

第1部 『中南米音楽』の時代(3)

おはなし：中西環江 (聞き手：高場 将美)

『中南米音楽』は、1952(昭和27)年5月に、中南米音楽研究会 Sociedad del Estudio de la Música Iberoamericana——通称「セミ S.E.M.I」——の機関誌として創刊されました。これを、会員のサークルを超えた雑誌にしたのが中西義郎(なかにし・よしお)さんです。

雑誌『中南米音楽』は、中西さんの熱意と努力で、1960年代前半には、マイナーな分野の専門誌ではありますが、世間に認められるまともな月刊誌になりました。現在の『ラティーナ』誌は、この直接の延長線上にあります。

いっぽうで中西さんは、1964年に、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京(歌手：藤沢嵐子、阿保郁夫、柚木秀子)のアルゼンチン公演の協力・随行者となりました。

そして、アルゼンチン・タンゴ楽団の日本公演の、招聘元との橋渡しの仕事もはじめました。1965年に、労音のネットワークで、オスバルド・プグリエーセ楽団の全国公演を実現しました。さらに、1970年のホセ・バッソ楽団で、「民音タンゴ・シリーズ」をスタートさせました。メキシコのロス・トレス・ディアマンテスの初来日にも協力、フォルクローレの巨匠アタウワルパ・ユパンキの後期の公演も実現しました。

また1960年代からアルゼンチンのLPレコードの輸入(とても少数)。本格化できたのは後年ですがアルゼンチン以外にもCDや民俗楽器・出版物などの輸入販売をしてきました。

中西義郎さんは1992年にブエノスアイレスで仕事を終えて日本に帰る空で、この世を去られました。

中西環江(なかにし・たまえ)さんは、その奥さんで、すべての実務に、ときには義郎さん以上にたずさわってきた方です。(高場・記)



中西環江さんと オスバルド・プグリエーセ夫妻
——1984年8月、ブエノスアイレス、エセイ
サ空港に出迎えに来てくれた。

歌手ビルヒニア・ルーケと
——1997年8月、ブエ
ノスアイレス《El Viejo
Almacén》にて。



第2部 タンゴとフォルクローレ

うた：峰 万里恵 ギター：高場 将美

1. ブエノスアイレスの歌 *La canción de Buenos Aires* <tango>

詞：マヌエル・ロメロ Manuel Romero

曲：アスセーナ・マイサーニ Azucena Maizani
オレスステス・クーファロ Orestes Cúfaro

●女性歌手マイサーニは、夫だったヴァイオリン奏者ロベルト・セリージョ、およびピアニストのオレスステス・クーファロを伴奏者として、かなり長期のヨーロッパ・ツアーをして、1932年にブエノスアイレスで帰国公演をしました。そのとき外国でもっていた気持ちを伝えたいと、この曲を発表しました。まず、マイサーニの話を聞いて、劇場レビューの脚本などで大活躍のロメロが歌詞をつくったのでしょうか。その歌詞をもとに……歌いだしのメロディはマイサーニが、それを発展させて残りをクーファロが作曲したと推察されます。

ブエノスアイレス、遠くにいたときわたしのなぐさめはただひとつ、バンドネオンの泣く甘いタンゴのメロディだった。

ブエノスアイレス、よその空の下でおまえを思っ
ため息をつきながら、わたしの心はどれほど泣いたこ

とか！ おまえのノスタルジックな歌を聴きながら。

ブエノスアイレス、タンゴの生まれたところ、わたしの愛する土地。わたしはおまえに捧げたい、歌に魂のすべてをこめて。そしてわたしの運命にお願いしよう。命の終わるとき、おまえのノスタルジックな歌を口ずさむバンドネオンの泣き声を聞いていたいと。

ブエノスアイレスの歌、おまえの奥底にはなにか、いつまでも生きつづけるものがある。ブエノスアイレスの歌、苦悩の哀歌、希望のほほえみ、情熱のすすり泣き。

それがタンゴ、ブエノスアイレスの歌。場末の生まれ、いま世界に君臨する。それがタンゴ、土地っ子のわたしの心のいちばん深いところに突き刺さって、いつもわたしといっしょ。

2. バルデラーマ *Balderrama* <zamba>

詞：マヌエル・J・カスティージャ Manuel J. Castilla

曲：クチ・レギサモン Gustavo “Cuchi” Leguizamón

●バルデラーマ兄弟の酒場（兼食堂）は、アルゼンチン北西部サルタ市にあり、1950～60年代に、種々のアーティスト、詩人、歌い手、ミュージシャンといったボヘミアンの溜まり場でした。ふつうの人は行かない店で、またお客は懐の豊かでない人ばかりで、お金を払わない（払えない）……兄が亡くなった後に店じまいするところでしたが、この曲の大ヒットで有名になり、現在も「バルデラーマ」の名前で、運河のほとりの街角の同じ場所に存続します（本来は店の名前はなかった）。でも、どちらかというと観光客向けのフォルクローレ・ライブショーの店になってしまいました（日本の『地球の歩き方』にまで載っていますよ！）。

かつての名物料理ピカンテ・デ・ポジョの秘伝の味も、もはや幻です。この料理は、ゆでた若鶏の肉を裂いて、チリ、ニンニク、ゆで汁に浸したパンなどを材料にしたソースをかけたもの——ボリビア原産で、アルゼンチンでは、フワイ州とサルタ州で

この曲は、サルタを代表する高名な詩人と、親友の弁護士・ピアニスト・作曲家が、合作したサンバです。も

ちろんふたりとも、バルデラーマの店でよく飲んでいたボヘミアンたちです。

水路のほとり、朝がやってくる時、夜がうたいながら出てくる、バルデラーマの店から。

中はただただふるえ。バグワラ（山歌）といっしょのボンボ。そして店は燃えながら乱れ騒ぐ。ギターよ 火花を散らせ。

もしだれかが うたいはじめれば、馬車ひきがいっしょにうたう。そしてワインのコップのひとつづつの中に、明けの明星がふるえる。

夜明けのサンバ、バルデラーマのざわめき。真夜中にはうたっている、夜明け前には泣いている。

明星……ひとりぼっち……暁の芽生え。わたしたちの行く先はどこになるのだ、もしバルデラーマが消えてしまったら。

3. ウパカライの思い出 *Recuerdo de Ypacaraí* <guaranía>

詞：スレーマ・デ・ミルキン *Zulema de Mirkin* 曲：デメートリオ・オルティース *Demetrio Ortiz*

●作曲者はパラグアイ人の歌手・朗読家でギタリスト、政治的理由で母国を離れ、アルゼンチンで一生を終えました。この曲は、故郷のウパカライ湖（首都アスンシオンの近郊にある）のほとりでの実体験をもとに作曲。パラグアイ先住民のことばグワラニ語で歌詞をつけました。後年、アルゼンチンの女性詩人で文学評論家のスレーマ（夫はラテンアメリカ各国のナイトクラブなどでうたう歌手だった）によるスペイン語歌詞のよって、広く知られるようになりました。

なお、グワラニ語で“y”と表記される音は、カタカナでは、「イ」よりも「ウ」に近いです（どちらでもないのですが）。唇の両端を「イー」というように引っ張

って、でも口の中で「ウツ」という感じです。

ある暖かい夜、わたしたちは知り合った、ウパカライの青い湖のほとりで。あなたは悲しげに、道すがらうたっていた、グワラニ語で、古いメロディの数々を。そして、あなたの歌の魔力とともに、わたしの中にあなたへの愛が生まれていった。満月の美しい夜の中、あなたの白い両手から、わたしに伝わった熱と愛情。

どこにいる？ むすめよ。あなたの柔らかい歌声はわたしのところにとどかない。すべてがあなたを思い出させる、ウパカライの青い湖のほとり。わたしの愛はあなたを待っている、むすめよ。

4. 亜麻の花 *Flor de lino* <vals criollo>

詞：オメーロ・エスポーシト *Homero Expósito* 曲：エクトル・エスタンポーニ *Héctor Stamponi*

●1940年代に、独自の感覚とスタイルで、タンゴの歌詞に革命を起こしたエスポーシトは、ブエノスアイレス州カンパーナ市出身。この曲の作曲者エスタンポーニ（ピアノ）、さらにフランチェニ（ヴァイオリン）、ポンティエール（バンドネオン）など、みんな近くの出身で、同郷で親友。彼らも40年代のタンゴの音楽的革新に大きな役割を果たし、今日までその影響が生きつづけています。

彼女は「夜」の花びらをむしっていた、ひとつのキスを、むなしく待ちながら。でもわたしは、繁殖のときの大地の大きなキスを夢見ていた。——亜麻の花、どんな不思議な運命が、花ひらく亜麻の道を断ち切ってしまったのか！

彼女は「夜」の花びらをむしっていた、わたしがいま彼女を待っているのと同じように待ちながら。彼女は恥ずかしさでいっぱいだった、新しい服を着せられた男の子のように。——不在の花、あなたの思い出はいつでも わたしを追いかけてくる、わたしの孤独の、いつでもの夜の中を。

思い出が生まれ故郷に帰ってくるためには、柵を通り抜けなければいけない。その柵は、愛さなかったことの悔恨が、いつでも開けたままにしている。——亜麻の花、あの星のなかにあなたが見える。その星は照らしている、わたしの孤独の道を。

彼女は「夜」の花びらをむしっていた、わたしがいま彼女を待っているのと同じように待ちながら。彼女は恥ずかしさでいっぱいだった、町に着いたびんぼうなガウチョのように。——どれほどのものが去っていったことか！ そして、きょう、いつも必ず、帰ってくる、わたしの孤独の、いつでもの夜の中を。

わたしは彼女が亜麻のように花咲くのを見た、太陽で熟した アルゼンチンの大地の亜麻のように。もしわたしが 彼女のことを理解していたら、わたしの小屋には、もう愛があったのに！

わたしは彼女が花咲くのを見た。でもある日——悪魔に食われる！——彼女をわたしから連れ去った わだちの跡。亜麻の花は行ってしまった。そしてきょうのは花ざかり——呪われてしまえ！ わたしには彼女の愛がない。

5. 小雨降る径 *Il pleut sur la route* <tango chanté>

詞：ロベール・シャンフルリ *Robert Chamfleury* 曲：ヘンリー・ヒンメル *Henry Himmel*

●作曲者はドイツ人で、フランスに脱出(?)してきて活動したようです。このタンゴはドイツで作曲（自身で作詞も）、そのときのタイトルは『霧の日々にも』でした。フランスで『街道の上に雨が降る』というタイトル、新しい歌詞がつき、まず女性歌手リス・ゴージェティがうたったとのこと。ほどなく、コルシカ出身の歌手ティノ・ロッシのレコードが出て大ヒットしました（1935年）。日本での初めてのレコードは、淡谷のり子歌の『雨の

夜は』でしょう。藤田嗣治画伯による日本語歌詞は、フランスの歌詞に可能な限り近づけています（「小雨」ではないです）。

作詞者（本名：ユージェヌ・ゴアン）は、ナチ・ドイツに対するレジスタンスの活動家でもあったようです。本名のほうで『場末のバンドネオン』のフランス語歌詞をつくったらしいです。

街道の上に雨が降っている……心はそこで行く先を失う。夜の中でわたしは耳を澄ます、あなたの足音に……でもなんの物音もひびいてこない。そしてわたしのからだは震える、希望はもう風に吹き飛ばされてしまう、あなたが来ることはないのだろうか？

外は風……雨……それでも あなたがわたしを愛していれば、あなたはやってくるだろう、今夜にでも……街道の上に雨が降る。夜の中でわたしは耳を澄ます。物音のするたびにわたしの心はときめく、あなたが来

ることはないのだろうか？

稲妻と雷鳴が、切り立った空の、いたるところに！でも愛はすべてをあざ笑う。

彼女は言った、「今夜」と。彼女をむかえるために、わたしの家ではすべてが希望をうたっている。

街道の上に雨が降る。夜の中で わたしは耳を澄ます。物音のするたびにわたしの心はときめく。あなたが来ることはないのだろうか？

6. 銀のさかずき フイの町 *Tacita de plata* <zamba>

詞：ハビエール・シピオーロ *Javier Cipriolo* 曲：シモン兄弟 *Hermanos Simón*

●シモン家の5人きょうだい（バンドネオン、ギター2、ボンボ、女性歌手）は、サンティアゴ出身で、1930～60年代、フォルクローレのダンス・パーティやラジオ放送で、この地方に根ざして活動しました。

この曲はサンバのリズムで、アルゼンチンの北端フイ州の町をうたっています。なお「銀のかわいいさかずき」という名称は、フイ市にかぎらず、スペイン語世界で、魅惑的な街への賛辞としてつかわれます。

数々の山の頂と雪のあいだにおまえはいる、青空の下で輝きながら。銀の小さなさかずき、アンデスが形づくったさかずき。そしてそれをインカ皇帝は名づけた——フイ、フイ！

だれか年とった羊飼いのケーナが、アイランポ（サボテンの1種）の茂みに悲しくひびく。チュルキは香りを放つ、サボテンは花を咲かせる。そして山では歌

になる、ひとつの泉が。

とある悩みを 風がいっしょに連れて行った。アンデス高原の 限りない孤独を通して。山は泣いた、その永遠の痛みを。そしてエルケ（角笛）には芽生えた、この歌のしらべが。

コージャは このわたしの同じ声でうたう。粗けずりで美しい鉱山の節まわし。野生のバグワラ、百の愛のうた、それらを石たちのなかに残していったのはカーニバル。

そしてふたたび 夢見るために わたしは帰ろう あちらのほうへ。

渓谷と谷間たち、わたしの声がたどり着くだろう、そして山々のなかで言うだろう——フイ、フイ！

チャランゴとケーナたちは 数百年を経た声で わたしのサンバの中で言うだろう——フイ、フイ！

7. ハシント・チクラーナ *Jacinto Chiclana* <milonga>

詩：ホルヘ・ルイス・ボルヘス *Jorge Luis Borges* 曲：アストル・ピアソラ *Astor Piazzolla*

●アルゼンチンを代表する文学者ボルヘスの詩に、今日のタンゴを創造したピアソラが作曲。ただしうたわれているのは19世紀のブエノスアイレス（まだ「大草原の大きな村」だった）なので、草原の吟遊詩人の物語歌ミロンガのスタイルを使っています。1965年発表。

バルバネーラ地区は、国会議事堂、いまはショッピング・センターに再開発されたアバスト市場、ユダヤ系の衣類商店街「オンセ」を含む、ブエノスアイレスの中核的な区域。

わたしは覚えている、バルバネーラ区でのこと、遠いある夜だった。だれかが気づかずに落としていった名前、ハシント・チクラーナとか言っていた。

またなにか人の噂にもあった。ある街角のこと、ナイフひとつのこと。それ以上のことは、年月があいだをへだてて、もう見せてくれない。果し合いとナイフの輝きは、いま

は見えない。

どんな理由があるのか見当もつかないけれど、その名前がわたしを探し求めている！ わたしは知りたいものだ。ハシント・チクラーナという男はどのようだったのだろう。

わたしの目には背が高く見える。そして本物の男、思慮深い魂の持ち主。声を高めないでいることができる、そして命を賭けることが。

だれも、彼よりもしっかりと地面を踏んでいったことはないだろう。

だれも、彼のようなものはいなかったろう、愛において、そして戦いにおいて。

小さな果樹園ひとつと中庭ひとつの上に、バルバネーラ教会の塔たち。

そして、あの、ありふれた「死」——どこにでもあ

8. ラ・オルビダーダ (忘れられていたチャカレーラ)

La olvidada <chacarera>

詞：アタウワルパ・ユパンキ *Atahualpa Yupanqui*

曲：ディーアス兄弟 *Hermanos Díaz*

●サンティアゴの土の音楽家ディーアス兄弟（バンドネオンとギター）が弾いていた曲に、ユパンキが作詞し、みずからギターを弾きながらうたって有名にしました。日本では『忘却のチャカレーラ』という題になっていましたが、ちょっと内容からズレるようです。荒野の道ばたに忘れられていたチャカレーラをディーアス兄弟が拾ってきたのです。

「わたしは見つけた このチャカレーラ。チャカレーラは、砂地で 悩んでいた、バランカの土地っ子男に置き去られて——彼はもうフーミの繁みを見ることはないだろう」

——このように ある土地っ子がうたっていた。サラビーナの土地っ子が、アルガローボの木の下で、とある1月（真夏）の昼下がり。

もう行くよ もうわたしは行くところだ、チルカ・フリアーナ町の方角へ。アイ 命のひと だれにもわからない、わたしに明日 何が起きるか。

おれのいとしい人は おれを置いて行ってしまったチルカ・フリアーナのほうへ。持って行ってしまった、馬と荷馬車、あのボンボ（太鼓）と あのダマフワナ（酒などを入れる大きなかめ）。

わたしはちょっとした木になりたい、とても大きくはなく とても小さくもない木に。ほんの少しの影をあげたい、道に疲れた人たちに。

もう行くよ もうわたしは行くところだ、アスパ・スーマ、サラビーナ。たぶん もう決して帰ってこないだろう、おまえの塩の原をながめに。

バランカ 愛する土地、おまえにこのチャカレーラを置いていく。命のひと、忘れてはいけない、野の奥に向かって行ってしまおう者を。

* フーミ＝塩の原に生える灌木。石けんの材料になるそうです。
* アルガローボ＝アルゼンチン北西部各地で非常に親しまれているマメ科ネムリグサ属（ミモザの仲間）の木。さやに入った豆が生る。発酵させてドブロクのような酒をつくり、カーニバルの飲み物にする。地中海沿岸の原産。日本名イナゴマメ。

9. 最後の酔い *La última curda* <tango>

詞：カトゥロ・カスティージョ *Cátulo Castillo*

曲：アニーバル・トロイロ *Aníbal Troilo*

●トローイロのマンションで、彼と、作詞家、そして歌手エドムンド・リバーロが飲んでいるときに、ひと晩でできあがった曲です。前からトローイロの頭の中にあった短いメロディを、発展させる形で、作曲と作詞が先になったり後になったりしながら進行していったらしいです。夜明けごろに完成し、窓を開けて、リバーロが下を通る通行人にうたったとか……1956年、場所はブエノスアイレスの中心街コリエンテス大通りでした。

まったく大衆の好みを無視したこの曲は「酔っぱらいが作った、わけのわからない変な曲」とだけ思われていました。でも1960年代の後半、リバーロとロベルト・ゴジェネーチェが、まるで押し売りするみたいに歌いつづけたことで、他の歌手たちも興味をひかれるようになりました。70年代からは、ゴジェネーチェの研究した語り方が、一般大衆にも感動を与え、現在は、この曲は広く「名曲」と認められています。

バンドネオン、おまえのしわがれ声の、やくざな呪いのことばが、わたしの心を痛めつける。ラム酒でできたおまえの涙は、泥が反乱を起こしている暗黒街までわたしを連れて行く。わかっている、もう言わないで。おまえは正しい！人生はひとつの、ばかばかしい

傷口。そしてすべては、あまりにもはかない。わたしの告白も、ただ一時の酔い。

おまえの、だらだらしたつぶやきは、ほんの少しの思い出と後悔をしたたらせている。おまえの酒は人の正体を失わせ、最後の酔いをぶちまけるとき、心臓の牛の群れを追ってゆく。大窓を閉めてくれ、太陽がゆっくりした螺旋（らせん）を燃やしている。おまえにはわからないのか？ わたしが忘れられた国から来たことが。そこはいつも灰色、アルコールの向こう側。

おまえの受けた罰のことを話しておくれ、おまえの失敗を語っておくれ。わたしを傷つけた悩みが、おまえには見えないのか？ あの愛のことを、ただそのまま話しておくれ。その愛は、忘却の裁ちくずの向こう側に行つて、ここにはいない。

わたしにはわかっている。こうやって泣きながら、ワインで語りつづけていることが、わたしをくるしめ、おまえを傷つけることを。でもそれは、バンドネオンよ、震えている古い愛なのだ。その古い愛は酔いつぶれさせてくれる酒を求めている。その酔いは最後には芝居を終わらせる、心に幕を閉めて。

10. 場末のメロディ *Melodía de arrabal* <tango>

詞: マリオ・バティステッラ Mario Battistella

曲: カルロス・ガルデル／エドゥアルド・ボネッシ Carlos Gardel / Eduardo Bonessi

●1932年にパリで撮影された歌手ガルデルの主演映画(同名)の主題歌です。著作権登録は彼の名前になっていますが、彼の声楽の先生ボネッシ(パリに来る船中ずっとレッスンをしていた)が作曲してガルデルにプレゼントしたものです。彼は、歌の率直な訴えがつつたわるようにメロディをちょっと単純化し、ハーモニーの凝った部分も簡単に直させています。そのほうが、ずっと魅力的な曲になりました。

作詞者はイタリア生まれで、大学はパリ、20代でアルゼンチンに来てレビュー作家などとしていた国際的ボヘミアン。映画制作当時は、パリにいて映画の字幕翻訳などしていました。ガルデルの通訳でした。この曲では、映画の脚本家レペラも作詞者としてクレジットされていますが、名前だけでしょう。

月が銀色に染める街、うすぐらい路地にバンドネオンのつぶやき。花のようにきれいな女の子が、コケティッシュに待っている、しずかな街灯の光の下で。

荒くれものと歌い手たちの生まれ故郷。おまえの壁に、わたしはナイフで愛する名前を刻んだ。キャバレーの女ローサ。金髪のリタ。町娘のリタは最初のデートでわたしに愛をくれた。

街よ……おまえには、センチメンタルなスズメの落ち着いた魂がある。悩み……祈り……やくざな街のすべてが、場末のメロディそのもの。

古い街よ……おまえを思い起こすわたしの眼から、涙の大きな粒がこぼれたら許しておくれ。涙はおまえの石だたみにころがるとき、長くつづくキスとなり、おまえにわたしの心を与える。

ごいっしょに時間をすごしていただきありがとうございました。
またお会いするのを楽しみにしております。
今後どうぞよろしく。

企画・選曲: 峰 万里恵 プログラム作成: 高場 将美

峰 万里恵 これからの出演スケジュール

2月23日(水)18時30分より、《四谷地域センター》

tango スエニョス(アルゼンチン・タンゴ愛好会) サロンダンスを楽しむ会

この夜は、黒木 皆夫さん(バンドネオン)のひきいる**スエニョス楽団**が出演します。
わたしもそこで2曲うたいます。会費**2000**円。どなたでも参加できます。

3月11日(金)18時より、《横浜人形の家》内《あかいくつ劇場》

飯泉 昌宏さん(ギター)のソロ・コンサートにゲスト出演。

題して『郷愁のブエノスアイレス』——タンゴ中心のコンサートです。入場料**2800**円。

3月26日(土)19時より、東中野《ポレポレ坐》

峰 万里恵と仲間たちによる新シリーズ《ワールド・ミュージックの館》

第1回は《精霊たちのつくったうた》。予約**3000**円(ワンドリンクつき。当日3500円)。

4月16日(土)19時より、高田馬場 スペイン・バル《Olé》

峰 万里恵／高場 将美のふたりによるライブです。

チャージ**1500**円(プラス平常のご飲食料金。おいしくて、良心的なお値段が大好評です)。

●お問い合わせ・ご予約は 峰 万里恵 tel: 03-3479-2420 fax: 03-3235-0470

●峰 万里恵ホームページ <http://mariemine.web.fc2.com/>